茶湯獨リ譜　五

455

當世茶湯獨譜

巻之五

○今紀州の茶まんじよ物数寄をするら人の其(?)見

てのまあ次茶し湯なとハいつるゝものれ

かしらとも知りもとといふ人も色士山宗匠

おりもくん多くありしとも思ふとよまぬ紀之こ

元分道人これをあざりかんまみなりよく然之

○沈ま取りしりく茶入くりくらい唐物

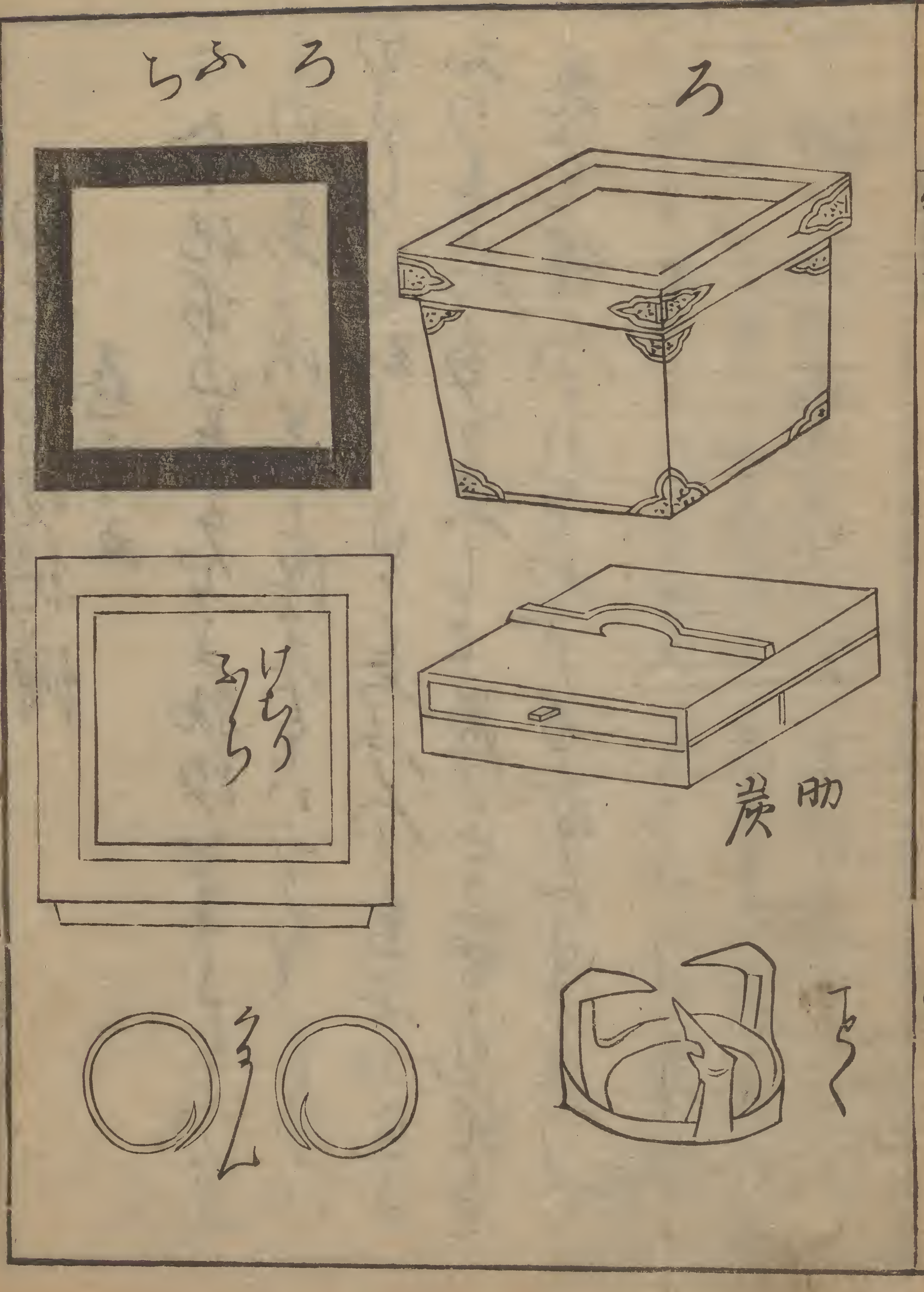
名物乙けれと中られるゝゝの元にまつるね

てあるみの御ま見でるりちも初ゆま見るん

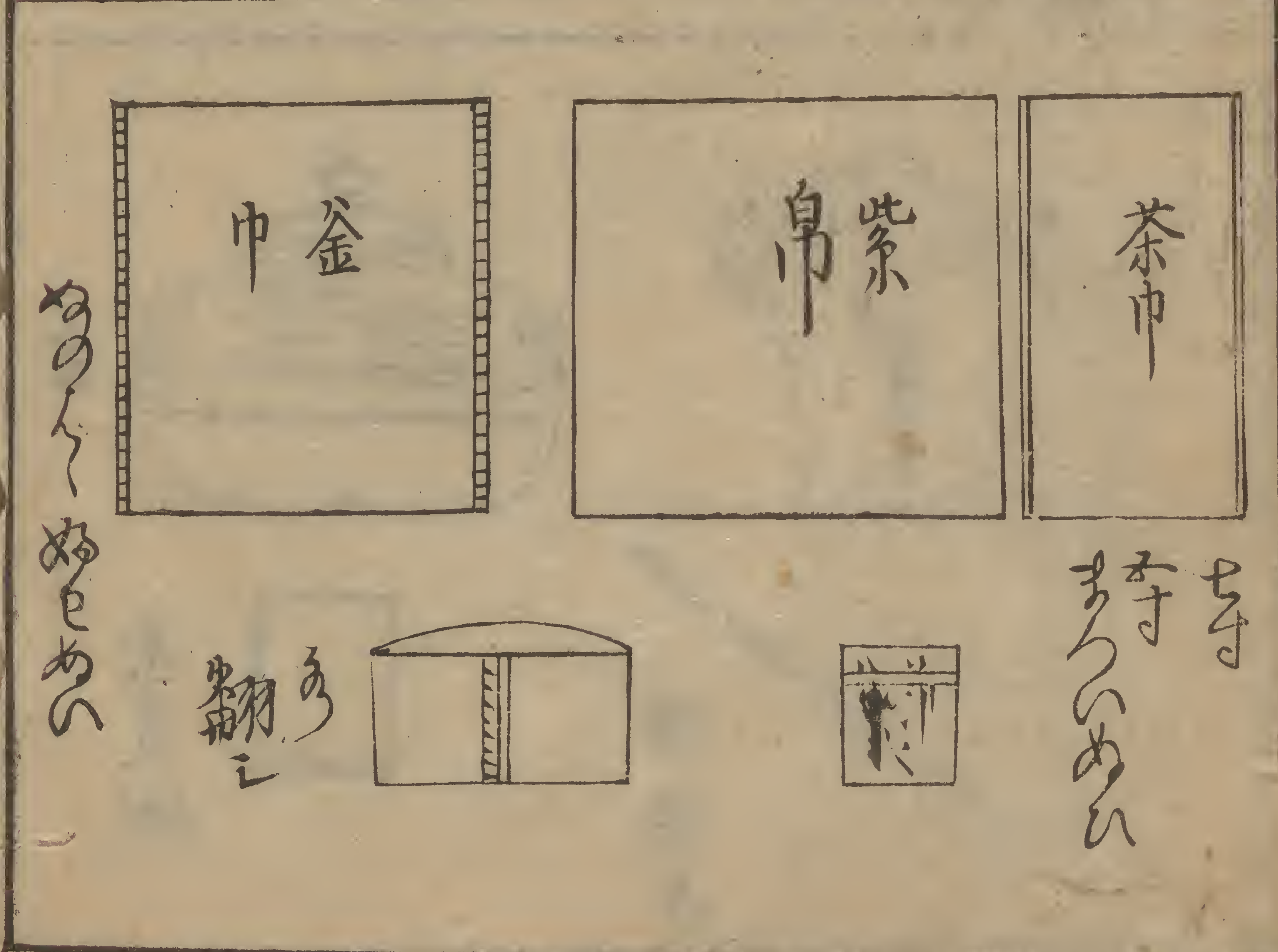
ありり

濃茶茶碗
茶筅
茶杓
棗
中次
濃茶入
薄茶茶碗

水さし
釜
柄杓

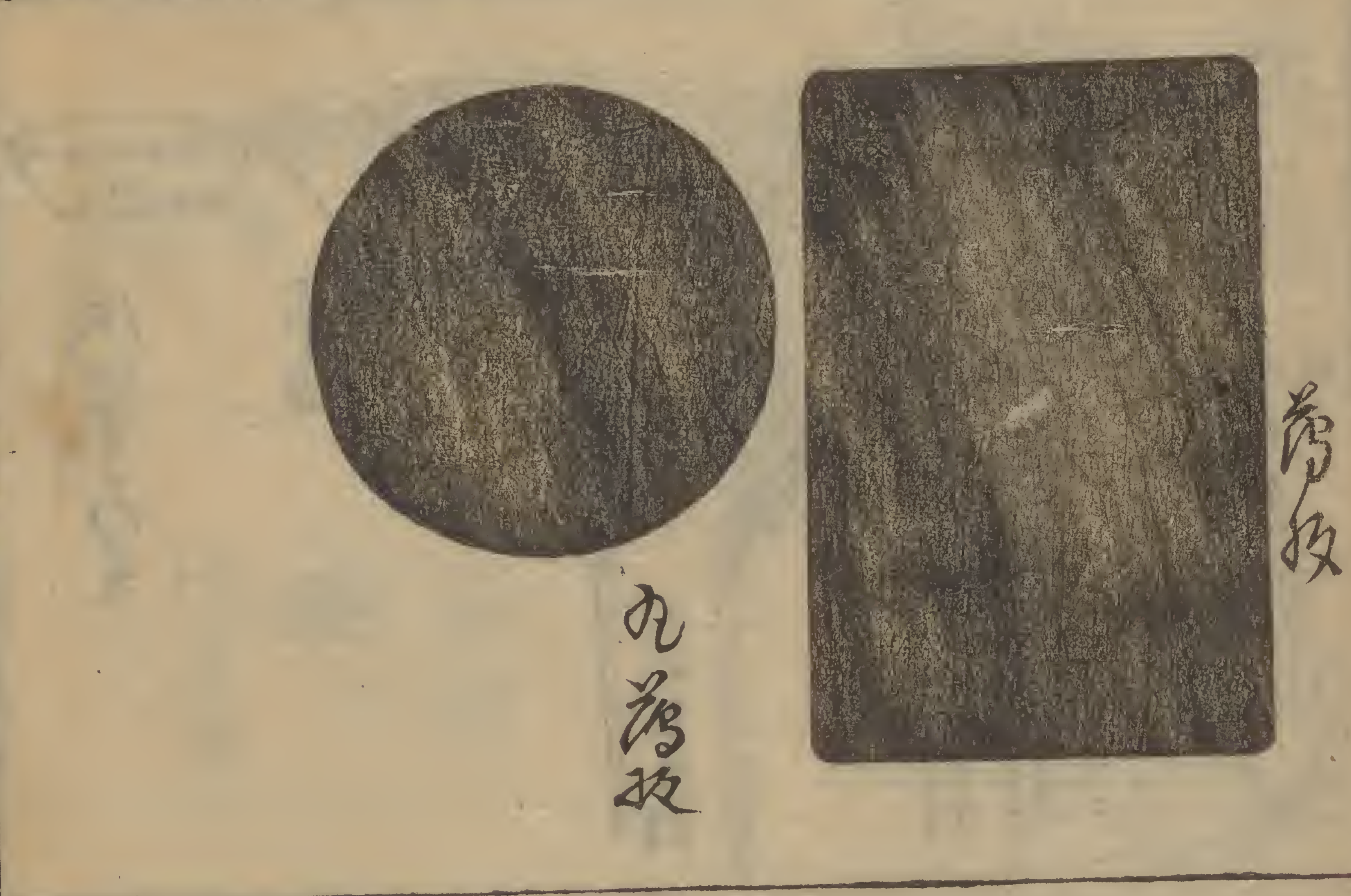

ろ
ろふち
助炭
ごとく

片口
香合
薫物

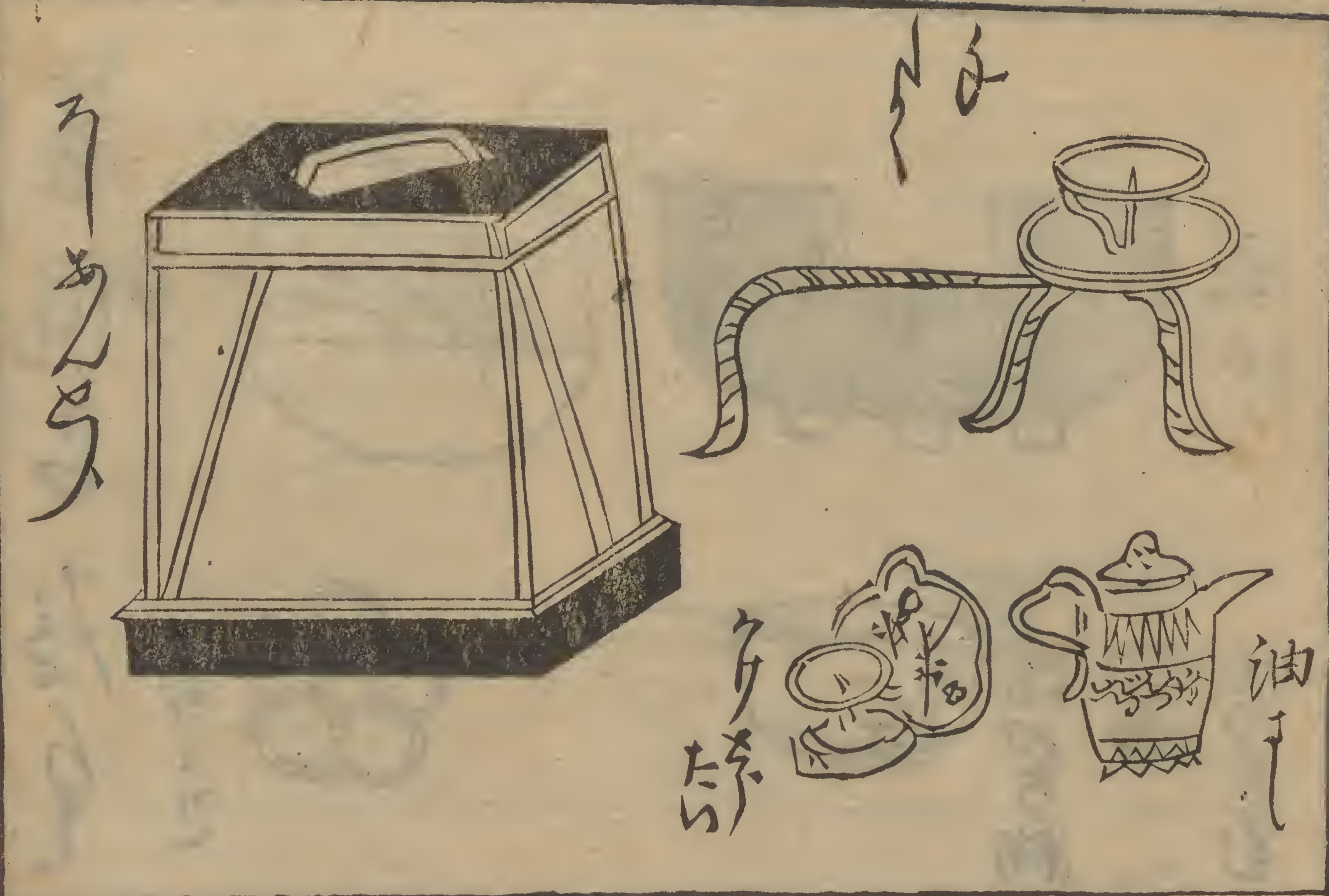

茶巾
釜巾

灰ほうろく

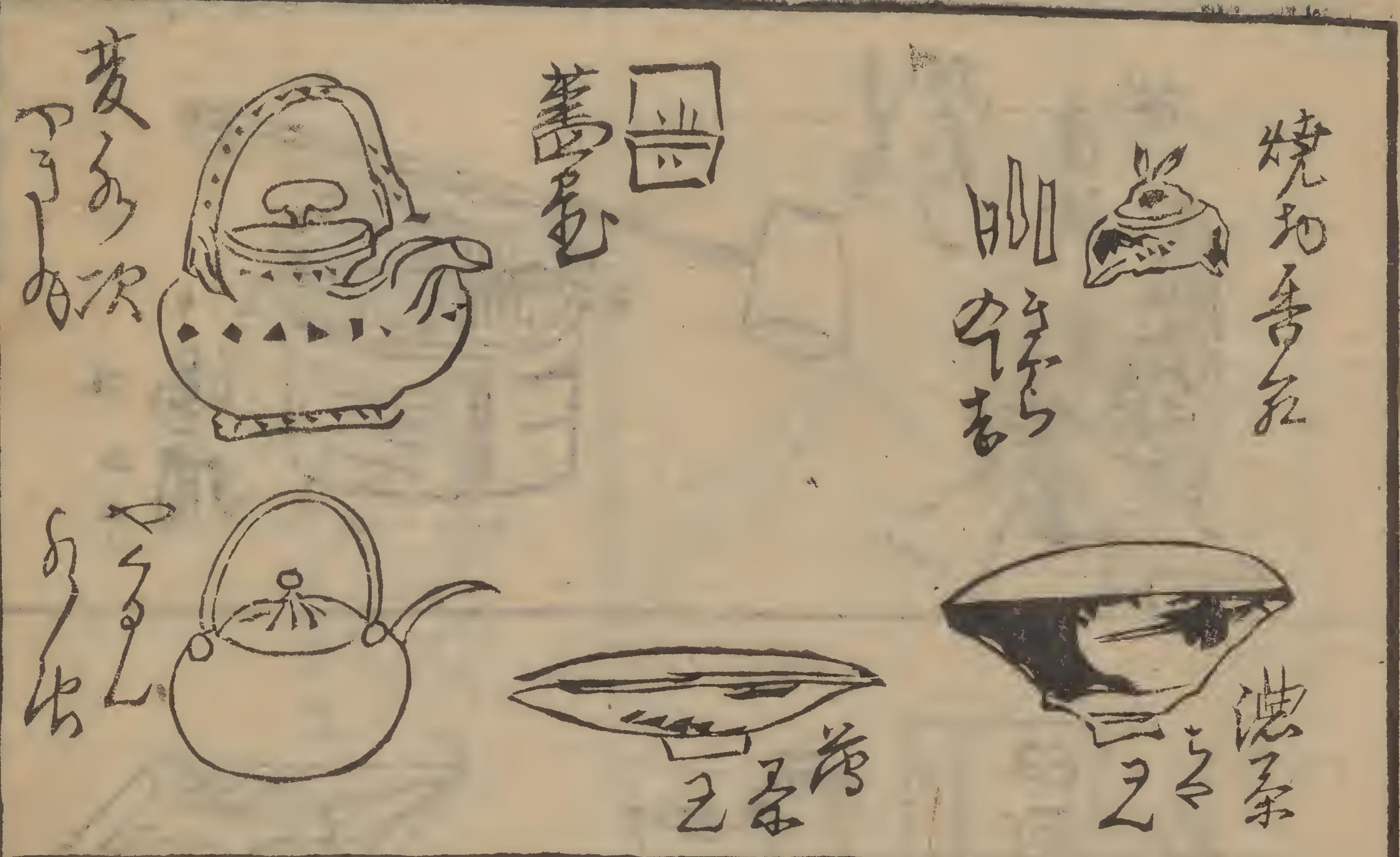
掛物


薬板
丸薬板

湯次
湯盆
茶菓子入
盆

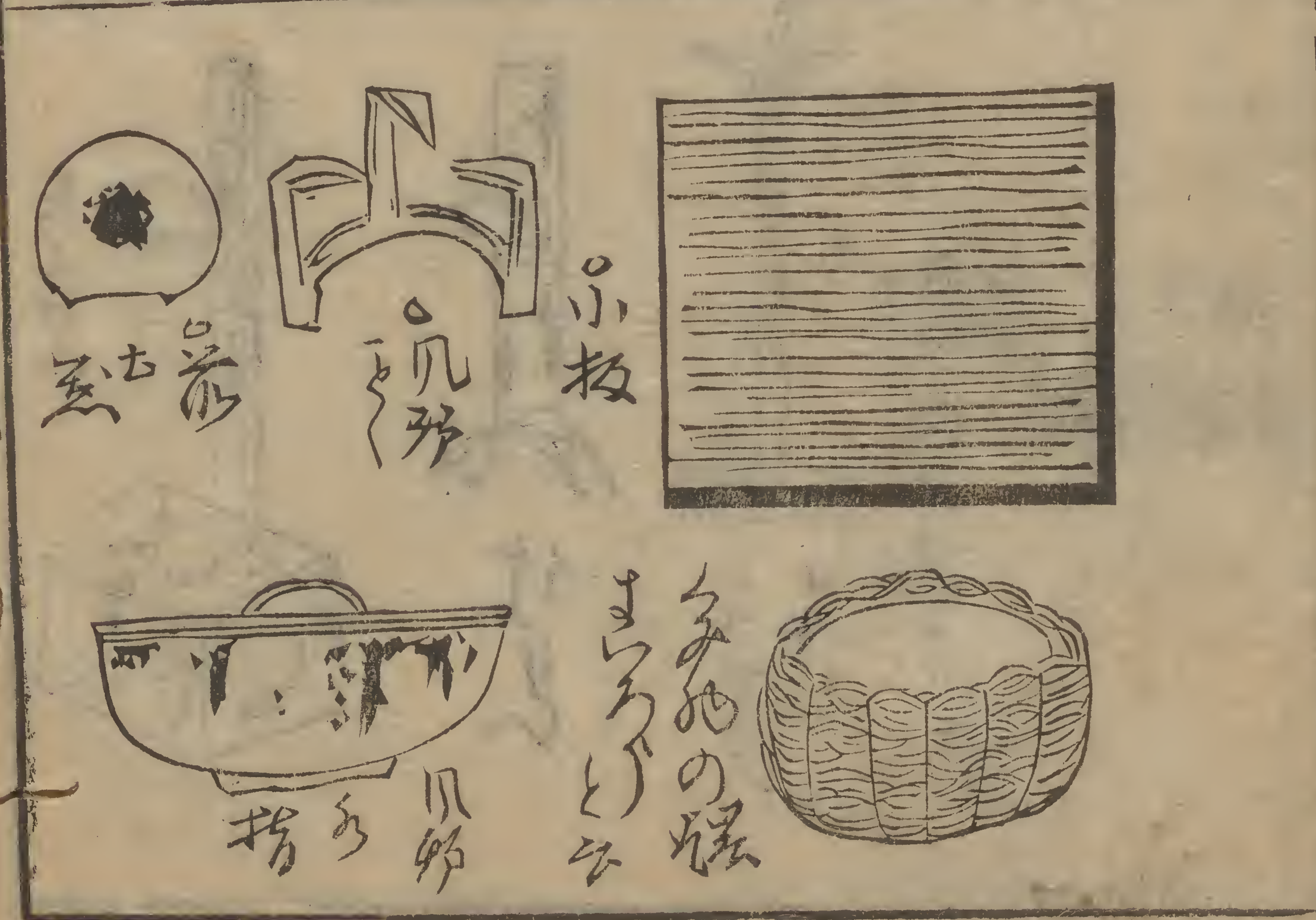

油さし

たんけい
竹けい
皿下


焼物香合
蓋置
濃茶

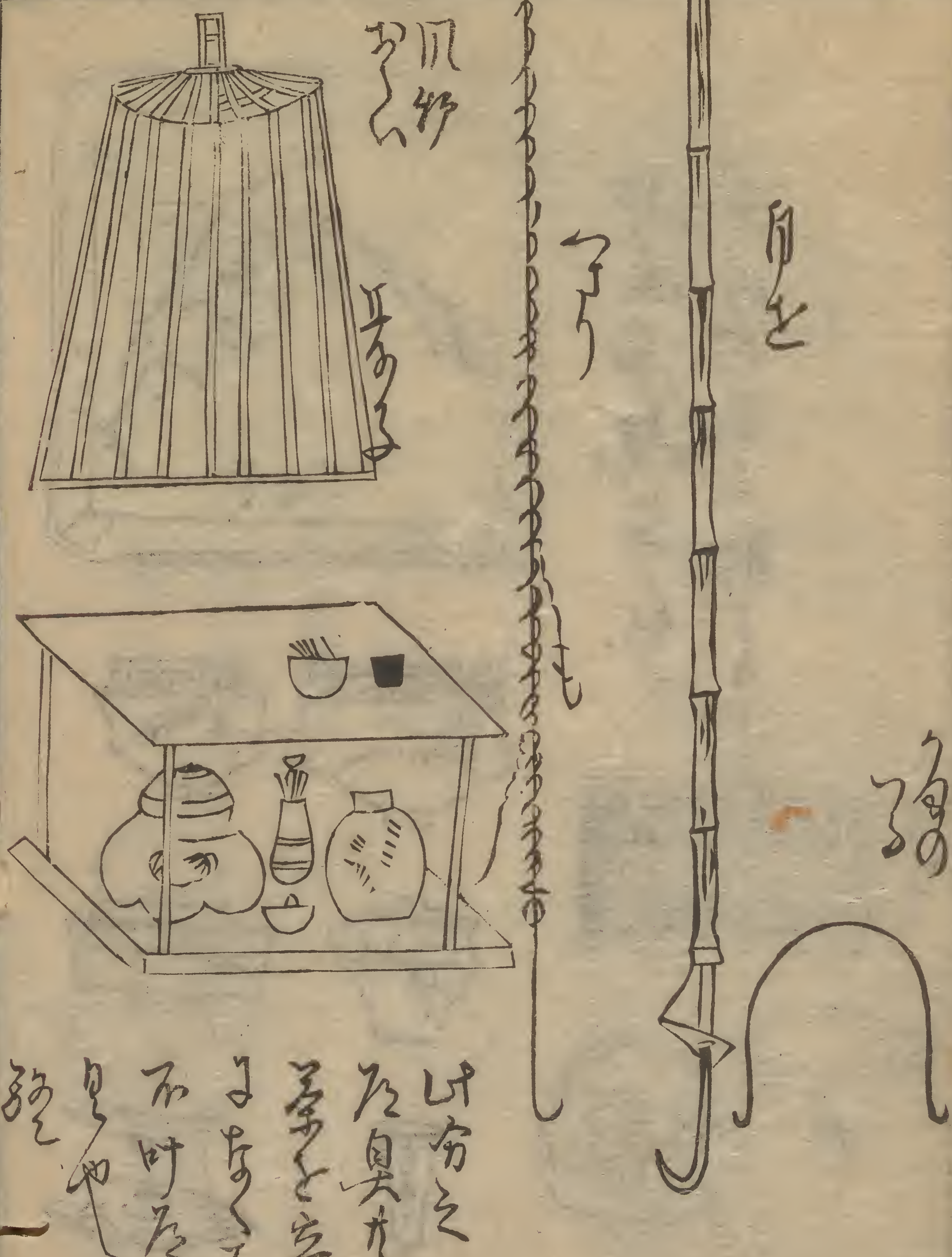
羽箒

風炉
焼物蓋置



湯桶
硯

皿



此分之
茶具也
茶を立
てなくて
不叶者
見しや
絵

名物茶入ハ名物盆ニ出ス

一 松の本茄子ト云茶入ハ
松の本盆の

一 松本盆ハ
利休墨じん盆立し品
付松本台携揲ノの

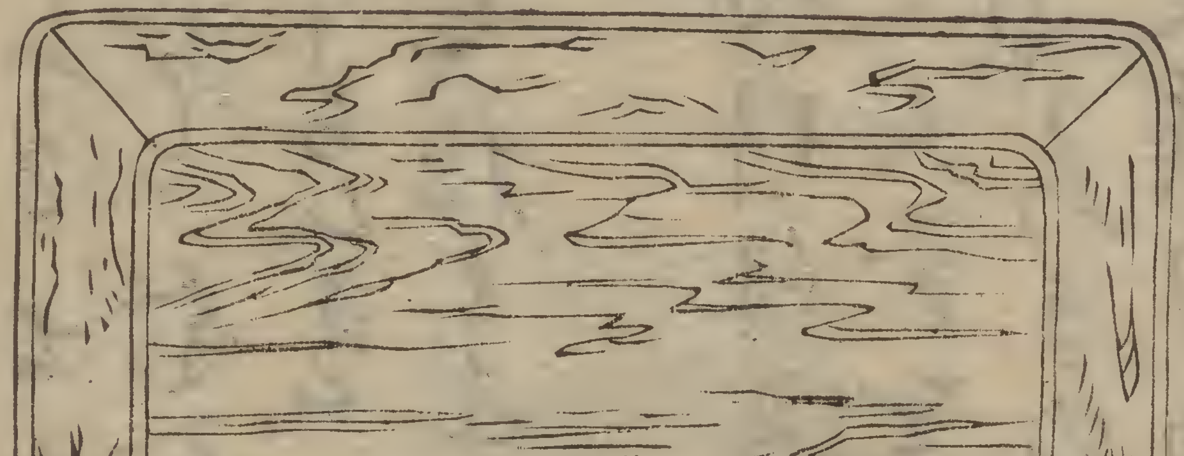
一 信長様の茶入ハ
清らきの盆ゝ品

松之木 若子

一文林のきさま
名物貝盆より
一掃茶人のきさま
名物ワのきみんの品
并ニ唐物丸盆より
一大盆大丸盆のきく
八寸盆 とじ盆のより
以下

松之木茶入之寫

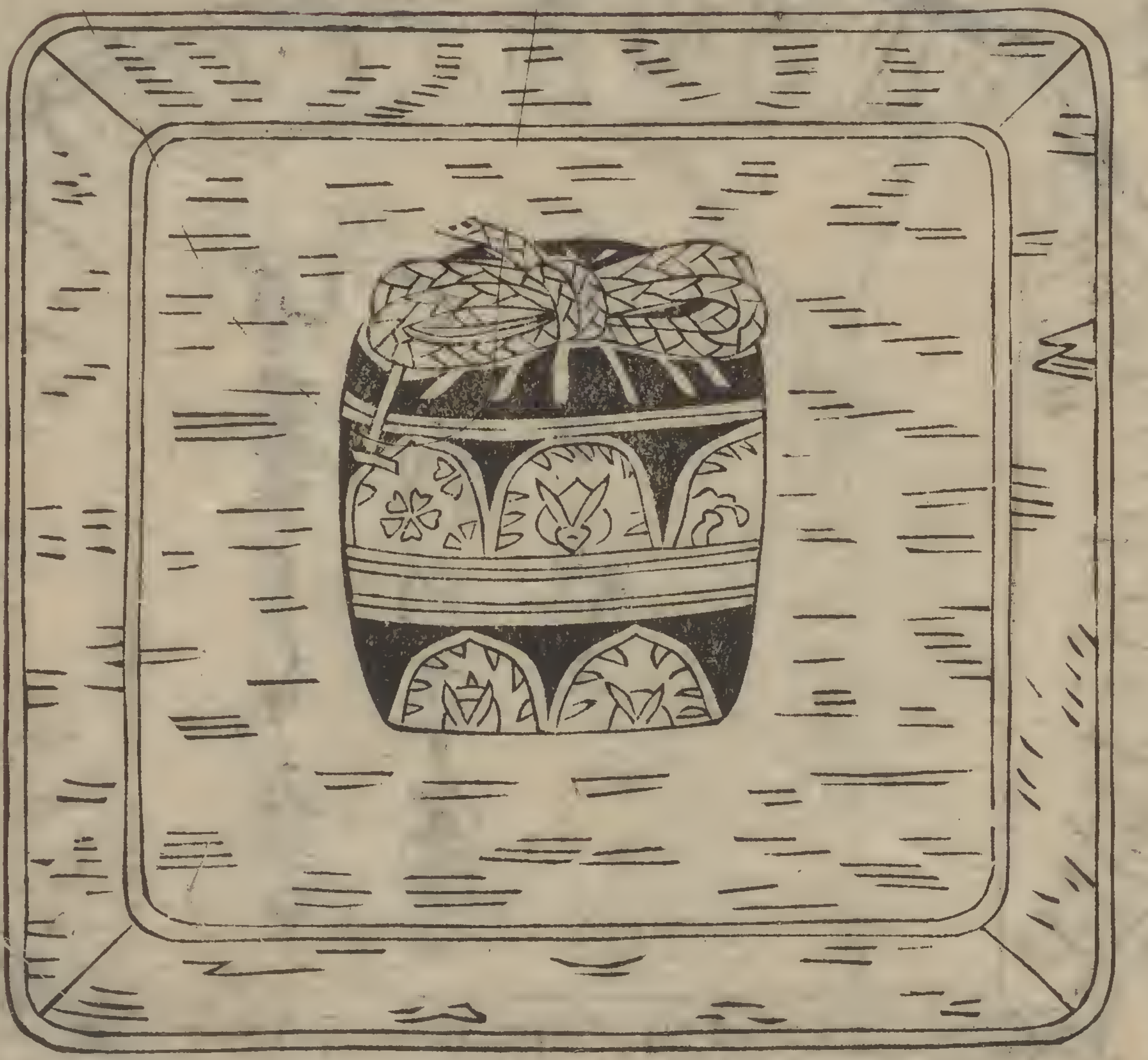
松之木盆 長如何来状之



○此茶入名物なれば故 盆にのせて
出し時 撰て寸法之 出る也 松ノ盆也
高さへだてて 七分五厘ほど 金入帛紗にて 包候ヲ
出くすこ あしらひも 松ノ木盆點
けすおのすこ 松の木盆 掌こ絶ス

○此は絶スハ千宗旦 利休居士 ねがひにて濃茶
上手の時分 器に 大壺を 引切ましめすに
つき木と云物にあり。ざつきの とくろ角形盆
しん新き 筆を 長緒の ふくろに入盆の内へ
荘 松木 茶入の あし 居ひおりけ ども 捨よし
り絶えしと 千宗旦 松木盆點 にくま也

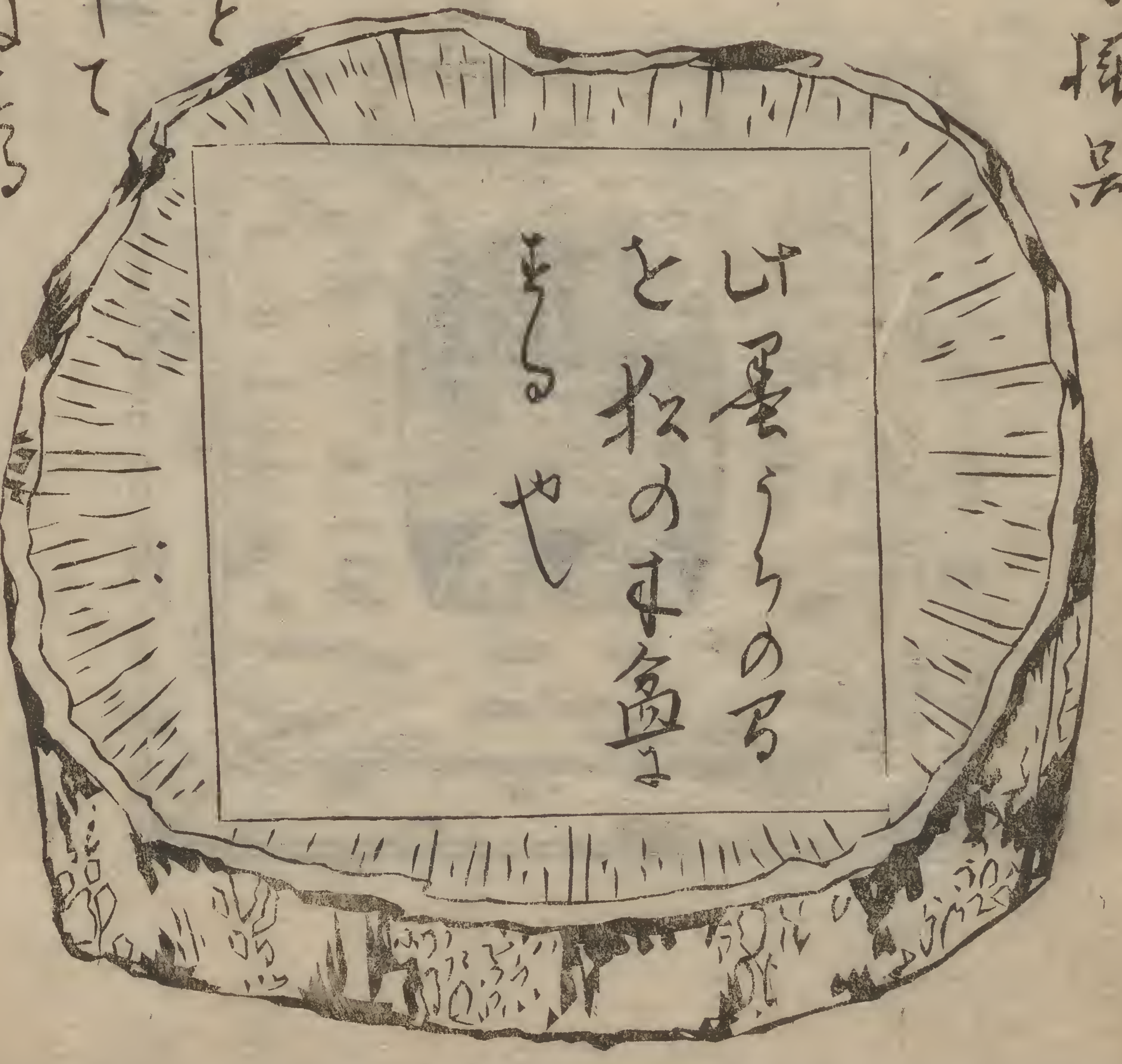
○利休形 松ノ木盆
長緒の茶入



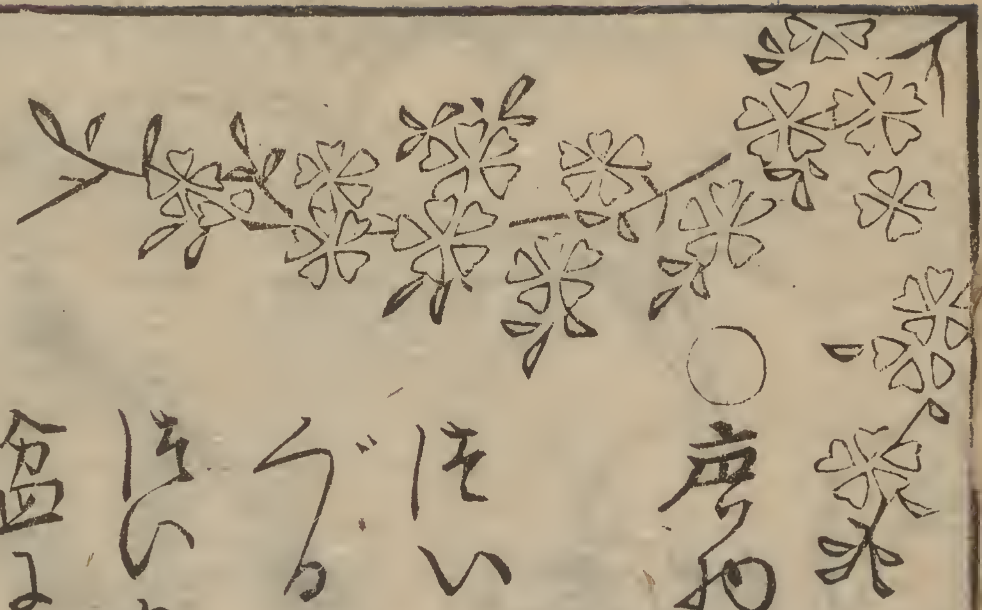
利休 松之木盆 梅掃呂

○此利まる手の
こぐちを
南かい切盆に
うらへまる地を
まるる汁盆に
ましめるし

○当世の松の木盆を
（かい敷）をうつして
まるまるまる 揚物にまる
まるし



○のぶなが公 桜の茶入



○唐物盒
ほいこ
ぐりの類
はいき木
盒ニ茶
茶杓並振
出有
信長公ぞうげの
茶杓を
利休のうし
御所望し
之
臺天目ニハ

林

文林

○みほいるゐし金入帛を
紙とすのも古
立二寸二ノ横同寸之
あまりてよる末
林と云へまいらへ
此実を見て形りを
似せたる 故文林といふこ

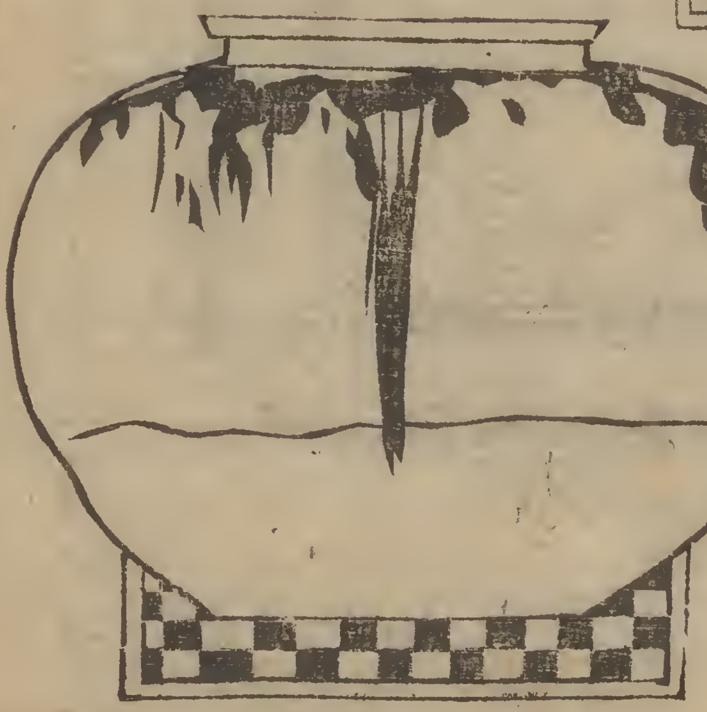
○唐物角盆
青貝類
文林家

○又此類も
此形をえよれ
梅盆抔とも
取よ分用ゆる
青貝ハ
螺でん
なりと上品とス。あしき貝とし

柿

柿ハめ行の柿ノ高と云作り取ヶ形之
此茶入名物ニ帛来盆ニのる

小柿



柿

土黒ク上薬濃柿
立壱寸之卜

○ワのさら盆
うハ青のぶんニ
裏黒し和青漆
盆極上品し
此盆ニて盆點を
古きハ唐の
あいらふあり
又田さ巾ひハ
習有もの也

○小盆
めづら丸盆有　皆朱裏青漆ニて唐物有
唐物唐蒔絵類
或い青貝類
又々の類
朱黒とも
唐物ヲ用

○日本物も
此形を元ニ之
極物ニして
上品じいなし

○右之小盆ハ座敷の飾物ハ茶入を盆ニ乗
立るものなり 相客ハ茶入拝見すると
いへとも 記ニ及ず 先達人ハみなよく知れ
たるより盆立の事ハくハしくしめしたれハ
茶写一巻にあらはしあれとも 筆を止め畢

○此盆の外ニ大盆 大丸盆ともに有なし
又小盆ニもへぎ盆 こじ盆とて有り
こし盆ハ木具なり 何れも白木 今の
ぬりさを入て用ひしにあたりなきなり
盆點前 至て委しく記す

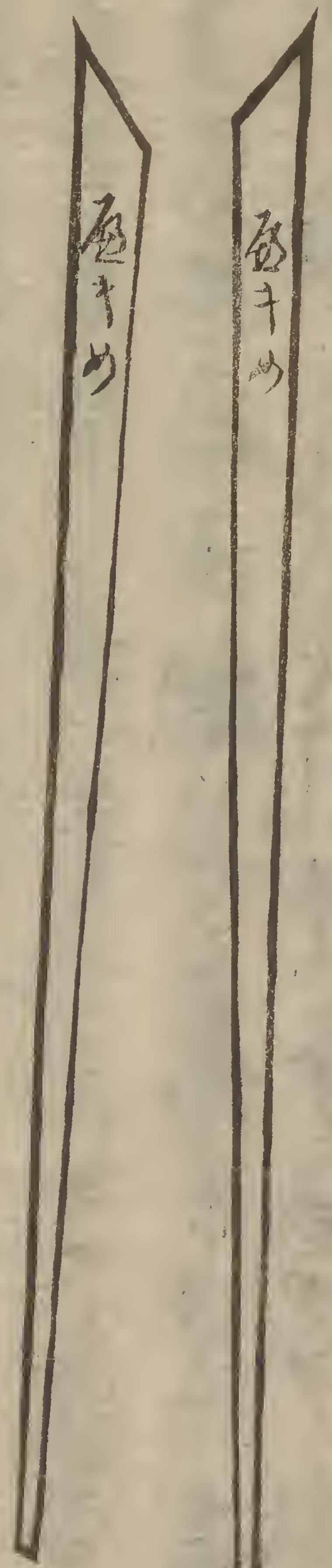
五ノ終

茶湯獨譜　巻六

○貴人を茶之湯に招き請るものハ依るべからず
まづ先高位高官なるハ是にいふにおよば
ず 貴賤ともに中人以上の遊人を
招かハ 傳へを究め出家の人をもおわれ家にあるを
茶に御成のかたの旨にあるハ又ハ次の人に
推移して招き主人有難旨 茶の湯相伴にて 慰
もて客ハ主人を受け宣しく能もてなしける茶の
事ハ 相人を頼みて茶事を用ふるとも 相客を定
るなり 又ハ至て 大事に
あり 饗応に 家見 ありて 物 多くハ 新茶 相応に 茶会

こん御紋なとを付るもや宮ゟ被下る其折子出と
御紋を付らるゝ 四十五 新あるか 箸楊枝
数多有る事ハ大臣坂なり 白箸ハ大くる
ある事中にる貴人ハ用ゆる也
○白箸長さ八寸上ふこ
○杉箸 利休ハ八寸くハ角也
○同 両細 平角面取也八寸五分也
○同 家よ 平丸 先細え也
○青箸 角箸式ハ青竹なと也 数多く用
○楊枝 数多くし黒もし 片附也
○同 杉長さ八寸ノ楊子上ふ見え分六寸五分又ハ八寸ハ婦人也 ひん細く折る用也

○同 白木の楊子五寸五分
くろもし 柳 桧ノだん 其外 菜箸なとん
格ほと寸法有る寸分ありとん也
但両楊子とも 横に祝第懸の
ありよさすし 畏りなる



○木具ハ本膳通盆
古本膳ハ七五三の内二ノ膳まで大臣坂
懸盤長さ一尺二寸五分 高さ五寸八分

○小南　大盃台　菓子の中にも八寸よし
通三ツ　折盃も　宝来台　木具の香盆
土器五六ツほとも成るも　二ツ盆大小
○様子数紀元に墨書食たさも崇の方の
人を東むき　御茶とるに者　亭主せん
と書院柳に　細かけ表をし　高麗縁
子に張付　紙風炉客を掛　縄は三尺
のなわ子あみやし茶をおろ出しよした封を
付ならよし
まち板　段る大板四尺二寸よ
大く二尺五寸　あつさ三寸　足寸六
中板　三尺二寸よ　長さ八寸よし
小板　幅八寸に長さ尺七寸よし

かようのさかしき物とはいまた見出さぬ　羽箒と
一緊は物と申すものを古人達人は向は
なくらし
動善蓋二つは釣瓶の竹不の立の竹　青竹　二節
右炉段　炉るなり　茶るそん右
羽箒炭斗　釜田炉なく　郭炭　柄杓茶杓
封筒茶入は御茶入　茶碗斗杓立
茶筅斗杓　香竹引切せんて　翻片口水指
湯掃具掛具　炉縁段　作首段　硯蓋紙右
一旦石　頭石　水石木太中切にしと入説よし
炉風炉の底茶之気分むしろよつてみ急のたい
入さあり　とつけ置る茶　儀よりなん去又たい座

・帛紗新おき茶もむつき帛 金入帛 白帛
何れにてもさ様あるへし
茶杓向掛るとき古今茶巾乃茶碗宗匠
あらため候事 捨ものナ
○茶具ハ四畳半ハ上下とも乱に茶上作り
し
○当日時刻ハ前刻より出立所へ亭主茶
道具出候ても諸式残らん迄に数寄のしあるへ
き事出時宜により亭へ入ん出る客 相伴出候へ
し 但し此加ハ前よりもとるへき事 亭主挨拶へ
ある 初ならん 待合にて茶をのみ候事 習有

出客のかたらい待合にいらせむかひに掛物 待合 床の
さきなんとと挿花なとさせけたとへは茶事の時
あすと亘りまで 待合にかかまくったいらん事あるへし
のまえなるさまに分かれ次の人すへて客と親しく
茶菓を出ふ三て茶を立つるや
其の八莊雲院蓋置とも置も主やれに置
こころのあるかけて置まし 客またんらへき
よりもいらう亘掛 用とう日 宗と別に
勤めしか数寄ある所のハ前んまへともあるへし
まつる用もののの事んにない
亭主帛紗手みありて中より出して下
切るもの存じてあり 亦傍にハ打常の入合 棧道具

○挨拶の人揃ひ〆出る客入て亭主も出て挨拶
ゐ戸亭主床にて客挨拶後も亦
の礼ありて客入中くゞり戸をしめ候
床の花を見て炉を見て引内に客並ふ事よ
亦たはらとも物ハ草萬のまゝ是のことく
を見入て貴人と諸事よきさのかけ
地をもらんかへる師匠とく
○其の貴人なき位を請てかへ入衣分ろ
あらハ日上を見二枚障子よ立て座
○露地流儀有之利流ハ其あるとき
えりもよく利休宗旦も石を置て
昔も一名 昔ハあれと露地かたりくる

よろしきは口傳あれども秘蔵なるゆゑ
書しるさずほどよきと云て
たとへばあまりもあしければ見えやうにて上手
の分候下手もかければ初心の為と心て
人これなきにし見苦しきと利のなきやうにすれば
悪きもしまりもなくて候へ　此初心の見て
先このへつまりぬるすると志れり
利休が丸石也今は宗旦けいの石を面白也
云られたる大様けしの石と思ひまた及
めけ分有年も人は路地をつくりのま
高ことを落しつくあの地のあたりにて
あるなまりよく御ふへし以上

○其外の招客も銘々にかるへからずして出
あるとき先ず貴人を御手前にて御招
力掛ケ置て其のくゝりの戸明れ二枚障子
明てうちの障子明んて座入あるなり也
亭主御座入ありて上下共に挨拶有て
ありけれ挨拶の人宜しく返答して其後
の返答之亭主此時貴人あらへと云習也
退去ありあとに所蔵炭此時おのおの手を添
あいさつ揃ひ師弟ともに何も有之八挨拶習答
持参入候物見を窺ひ扣へ挨拶の方へ挨拶し
ひとまず待合にて有らへ亭主鋳を用ひ去くべく上る
あるは薄茶を持ち酒湯上り茶菓子頂戴

其挨拶上りしと躙口の戸を志め亭主ハ勝手へ入也
客中立有掛物一同座敷の上にて退座有
掛物の拝見の下にて開座を拝見し
○亭主中立の元へ伺ひ遂て茶事をあ付の道
中上挨拶済て勝手へ入又ぞろ茶事手すき
立鳴物手掛に習有流儀にもあらし有
○数寄屋の茶事にて挨拶して去を拝し四つ六
見物も君よりなりと也ばよろしき
けたりと云也
○客中立の後入の時亭主の様子ふく台
○亭主茶道口羽箒をし挨拶おもむろ茶を取と
窺ひ挨拶有て茶碗拍子蓋置拝見あり

むかしより茶點るやうは時　貴人あいしらひ生き
たりとも云明日有り茶立候節　炭斗抔也
炭頭（き）液ミに小書院棚へ中津信と四つ足のかは
棚物荘乙茶子を中津子合有るかの物の羽箒
小茶子大棗子見あり箱手上下よりたれ有也
小棗抔　重重棚　吉棚　棚　セイロウ棚又茶
子は高麗茶子丸紅あり四方棚上は無られ
有あるまじ（お）茶まを棚たゞ茶たんす有也
又つりゆの時は棚のごとくとのゆ湯たぎらんと
ありへは火で（し）へ茶を下ケ置しさせ申しさと云へ
棚分ちへ自上ケ置し寛くて自然らの洞法也
ならりをかけ茶掛て下よりて入れす御遠の意也

○自在あつかひは定りもなし　天井ノ高下也
去りながら　利休は七ツを上品とする事也
八ツを中分としけん中の所へかけ候也
○書院　或はかり荘七ツ荘を眞の荘と云は
それを飾りなし　立花の花瓶の前置を
とつけて見　遠棚の荘抔もいろいろ見及
ものなれども　家によりて大きさまちまち
寺方荘時寸分の吟味として荘置する事
かりそめにも尽す事あんは元の所の所に置す
なくなるものや物に心を付るべし
書院床にミつ有　棚もなきもあり
荘也　書院を始め　遠棚荘　書院なる人

○又書院じまりの色を出す事よく当世好の本膳
までさしかけるすりしんちうしめりさうき
ろすらハ古風なとさんといふ也又利休形もあり
今もし此とてそのかきを言ハおりへ盃を
いふ又平四の角さを見るよくほそくまろのし
当別れ汲つと〆まるあもひろ見えるかかふし
宗和形別形もあり大なるハ大平椀のかさにて
とし色とりを平形色すりかきを二つに割る形
平四角ハ紐あり熊谷といふの色もとかるなり
○みかん形深形の椀かいめくしましあり眉
利休好飯椀折入形なと遠州好宗和好椀
黄塗椀ぬりかけたきつけ黒あり青漆黄土あり

うるみ青漆弁柄揚りハ朱朱漆形ハ色あり
本膳本椀引菜鉢の類書院平椀宗和茶
又数寄屋膳ハ大概二通之あるいハ手前
又焼物類四鉢ちよく瀬戸ものなし今焼の類
大架酒手重入類杉
又菓子ハ折をもし高つき皿手菓子皿蒔絵
ならべる当世ハ小廣蓋に入ハよくもちふし
みたてよろしきの皿角皿丸皿ゆりわるる
もの之内にて御膳すり又当世和すりじきの
当数寄を用いる色にて古代の法も定ありてさまざま
ぬりもの之蒔絵物ありハ塗やうなと蒔さの人好みにて
○梅沖立おもとまれハ…

人形ハ送り状として来るやし
追手取り始刻より有題旨に和に付に佐れ
じりとひ其之んじ上品し戯あらひと云ぬ
べし其子初る達人おわ給舎南世間よりさ
のり吉称く家くの法式捨ふくまきれくり来
まさり甚取りと云る云る人やと五男の座と
云たと達人をいひと古書云の人申しの云
きやし

ありり卵平ら有争之つぶさにア亜加し其
子うく此又かりへ今了頃きく口傳を
為又ハら他とも申成に其男よして学ならさ

めり盡のうら温メまうら見ゑるれ八中く
分ケ又へ中まりく之自しく達志之学人よ
段メ可ある段うらよ秋の白のられニ成致玄
の茶之湯よお称急をまうまさもら又く
書と気うまきお為一把めきさし

ちる秋
為ありくに

宝永元甲申九月上旬
京二條通数屋町西へ入
和泉屋　茂兵衛板
江戸上野黒門前中町
同　次郎右衛門

當世茶湯獨稽紀